

中国の弾道ミサイル迎撃システム建設計画

漢和防務評論 20130625

(訳者コメント)

漢和防務評論ネット版 6 月号に中国の弾道ミサイル迎撃システムについての記事がありましたので紹介します。

中国が弾道ミサイル迎撃システムを構築する目的は、ある国が中国に弾道ミサイル攻撃を仕掛ける可能性があり、中国が脅威を感じているためですが、中国軍内の論文によると、その国は第一にインド、第二に北朝鮮だそうです。米露を指定しない理由は、指定すると相手に対抗措置を採り、“戦略的安定”を乱すもとになると中国が考えているからでしょうか？インドや北朝鮮はその心配がない。

漢和防務評論によると、独自開発の HQ-19 型及び HQ-26 型迎撃ミサイルによって来襲する中距離弾道ミサイルをミッドコースの最終段階、大気圏外で撃墜するほか、ターミナル段階ではロシアから導入した S-400 で対処しようとしているようです。

現在は HQ-19 の実験段階にあり、将来は米国の NMD 計画の進展状況を見ながらシステムを構築するようになるということです。

KDR JOHN CHANG 報道：

中国は、2013 年 1 月、ミッドコース段階で迎撃するミサイルの発射実験を行った。これで中国が弾道ミサイル迎撃システムの開発速度を速めていることが明らかになった。なぜ弾道ミサイル迎撃システムの開発を速めるのか？なぜ中国はロシアと“戦略的安定”の問題を積極的に討論しようとするのか？相手は誰か？

この問題について中国軍内論文で討論が行なわれている。論文は、中国に対する弾道ミサイル攻撃で最も脅威となる国家は、インド、北朝鮮、台湾であると述べている。特に憂慮するのは、北京、三峡ダムを攻撃できるインドの“AGNI”シリーズの弾道ミサイルである。したがって中国が開発している弾道ミサイル迎撃システムの第一の作戦対象は米国ではなく、インドであり、次は北朝鮮である。現在の開発重点は、中距離弾道ミサイルの迎撃を可能にすることである。次の段階は、米国が開発している NMD 計画の進展を見ながら、大陸間弾道ミサイルを迎撃出来る類似の迎撃システムを開発して、新たな“戦略的安定”を達成することである。これは中露両国の戦略対話でも意見が一致する基本的な考え方であり、一つの課題である。現在の種々の情報及び弾道ミサイル迎撃実

験の状況から見ると、中国軍は、2 種類の高空用迎撃ミサイルを開発中のようにある。それらは HQ-19 型及び HQ-26 型であり、いずれも固体ロケットエンジンを採用している。HQ-26 は、高質量比でありパルス型固体ロケットエンジンを採用している。HQ-19 は、炭素繊維の弾体、N-15B 推進剤を採用し、エンジンは、質量比 0.85、比推力 260 秒の高加速固体エンジンを採用、要求される最大機動加速度は 60G である。これは、第 4 研究院が開発を担当する。

最近行われているミッドコース弾道ミサイル迎撃実験は、HQ-19 を使用している可能性が最も高いと KDR は確信している。HQ-19 は、明らかに KKV (KINETIC KILL VEHICLE) 型運動エネルギー弾頭、赤外線シーカーを採用、直接衝突方式で、来襲するミサイルが大気圏に再突入する前に撃破する。HQ-26 は、さらに高い質量比でありパルス型エンジンを採用しており、したがって射程は HQ-19 よりも長く、迎撃速度は更に高い。中国は、大気圏外迎撃ミサイルだけで同時に 2 種類のタイプのミサイルを開発中である。現在、米国と中国だけが KKV を開発中である。ロシアは、試験も行っておらず設計段階に留まっている。

中国が 2 種類の迎撃ミサイルを同時に開発する理由は、HQ-19 を主とする第 1 段階の中距離弾道ミサイル迎撃システムの建設に着手しつつあるからであろう。主として 3000 KM 以下の弾道ミサイルを目標とする HQ-26 の開発方針は、SM-3 BLOCK II B に似て、迎撃高度、速度を段階的に高め、大陸間弾道ミサイル迎撃能力を持つ方向に進める可能性が高い。現在 HQ-26 は、開発中のようにある。

ある西側の報道は、HQ-19 とロシアの S-400 型 SAM は関係がある、或いは協同開発した、或いは S-400 の技術を盗んだとか述べている。實際上、厳格な調査の結果分かったことは、HQ-19 は 1990 年代に開発を開始したので S-400 とは何の関係もない。中国空軍は、ひたすら S-400 の獲得を希望し、連続して何年も両国総理主導の軍事技術協力委員会の議題に提議している。ロシアは何度も拒否したあと、2012 年になってやっと正式に S-400 の対中輸出を認めた。

以上